『湯浅正次関係資料』
～ドキュメンタリー・カメラマンの記録～

メディア研究部　島田匠子

はじめに

今回は，『日本の素顔』（NHK 1957年～1964年）をはじめ，数々のドキュメンタリー番組などで，カメラマンとして活躍した湯浅正次（ゆあさまさじ）氏が所蔵し，その後，NHK放送文化研究所（以下，文研）に寄贈された番組制作関連の資料を紹介する。

NHK 広報映画『札幌より全世界へ』（1972 年）を撮影中の湯浅正次氏（写真右。左は吉田直哉氏）

湯浅正次氏は1929年，群馬県高崎市に生まれ，日本大学芸術学部映画学科を卒業後，1953年，読売映画社に入社し，ニュース取材のカメラマンとして，そのキャリアをスタートさせた。1960年にNHKに移った後も，主にドキュメンタリー・カメラマンとして，『日本の素顔』や『現代の映像』といった日本のテレビドキュメンタリーの草分けとも言える番組の制作に当たった。ディレクターとして活躍した故吉田直哉氏とともに作り上げた作品も多く，15回シリーズで放送した大型企画番組『明治百年』（1968年）や『NHK特集「遠野物語をゆく」―柳田國男の風景―』（1977年）は，その代表例である。

また，全日空機羽田沖墜落事故の原因を追った番組『謎の一瞬』（1966年・カメラマンとして制作に参加）が，イタリア賞コンクールのテレビドキュメンタリー部門で，日本のテレビ番組として初めて最高賞を受賞するなど，数々の受賞歴を持つ。1987年にNHKを退職した後は，フリーカメラマンとして，民放も含めて，幅広く活動をした。現役を退いた現在でも，どこに行くにもスチールカメラは手放さないという。

湯浅氏が所蔵してきた資料には，ドキュメンタリー番組が黎明期から黄金期を迎え，フィルムからVTRへと映像の世界が移り変わった時期の貴重な記録が含まれている。長きにわたり，ドキュメンタリー・カメラマンとして番組制作に携わった湯浅氏の残した資料とはどのようなものか，概要を紹介するとともに，いくつかを詳しく見ていく。

資料の概要

湯浅氏の活動については，放送に携わった人々の証言をオーラル・ヒストリーとしてまとめる研究の一環[1]として，文研でインタビューを行なってきたが，その過程で，撮影用台本や写真など，ドキュメンタリーの制作過程を記録した貴重な資料が自宅に残されていることがわかった。それらの資料は，今後，放送史の研究や番組制作に役立てることができると考えられたことから，文研への寄贈をお願いしたものである。

資料の内訳は，撮影用台本や，当時ではまだ珍しかった長期の海外取材の様子を物語るスナップ写真，撮影の記録を綴ったノート類，掲載記事の切り抜きなどで，150点で構成されている。これらの大半は，1960年代後半から1970年代にかけて作成されたものである。

資料の概要

- 撮影用台本 …… 53点
- 写真 …… 50点
- 取材計画書（打合せ稿）…… 10点
- 掲載記事（新聞，雑誌，書籍）… 25点
- 撮影記録ノート …… 3点
- その他（手紙など）…… 9点

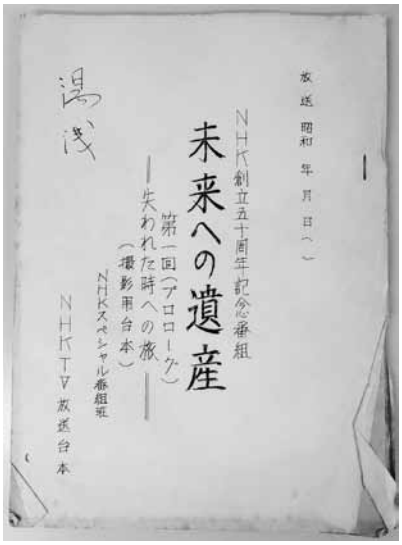
「その他」の資料には，点数は少ないものの，『NHK特集「遠野物語をゆく」―柳田國男の風景―』（1977年）に関する番組モニター報告や，視聴者からの感想の手紙など，番組が視聴者にどのように受け止められていたのかをうかがい知ることができるものが含まれている。また，湯浅氏が「カメラマン人生にとって忘れることのできない人間」と語る吉田直哉氏からの書簡や，全日空機羽田沖墜落事故の取材時に身に着けていた腕章も含まれる。

撮影用台本

資料の特徴として挙げられるのは，撮影用台本が多いことである。ドキュメンタリー番組で一般に台本と言えば，取材後，編集とナレーション入れを終え，基本的に放送番組と同内容を記した完成台本（放送台本）を指す。NHKアーカイブスに所蔵されている台本はこれを指す場合が多い。

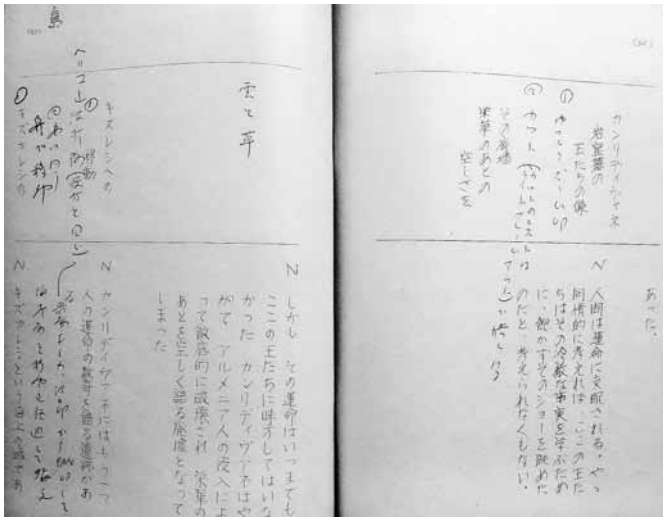
一方，湯浅氏が所蔵していた撮影用台本は，ディレクターが撮影前に，番組の意図と，それに則った映像と音声の組み立てを，カメラマンや技術スタッフに伝えるために作成したものである。ドキュメンタリー番組において，こうした台本が用意されたケースは必ずしも多くはない。しかも，撮影が終われば廃棄されてしまうものも多く，こうした制作過程をうかがうことができる撮影用台本が残されていたことは，非常に貴重である。

湯浅氏は，取材を前にディレクターから渡された撮影用台本をどう表現するか，「毎日毎日考えた。夜中でも考えた[2)]」と語っている。



『未来への遺産』第一回の撮影用台本
（1974年　左上に「湯浅」という文字が見られる）

撮影用台本が残されていた『未来への遺産』は，総合テレビで1974年3月から1975年12月にかけて放送された，大型シリーズ企画の海外取材ドキュメンタリー番組である。1964年に海外渡航の自由化が始まったが，1970年代の初めごろまでは，海外旅行は簡単には行けなかった時代である。各国の貴重な遺跡の数々の映像は，人々の憧れをかきたてるものであった。



カメラワークが書き込まれた撮影用台本

撮影用台本には，ディレクターが記した内容に，湯浅氏の手書きで，カメラワークについて書き加えられている。「①ゆっくりズームUP，②カット（カットのラストはライトフレームでアウト）」「ヘリコ→①波打際（最后と同じ）～最后FIX，波のUPからPAN UPして波打際を移動→旋回して海へ」（原文ママ）といった具合に，カメラポジションやアングル，使用機材などが走り書きされている。

この『未来への遺産』を含め，資料には，『明治百年』，『70年代われらの世界』（1970年～1975年）といった大型シリーズ企画の台本も残されている。

撮影記録

湯浅氏は，カメラマンとしての活動を「撮影記録」という形でとりまとめたノートや冊子も残している。これは回想録とも言えるものであるが，学生時代にカメラマンになろうとした経緯から始まり，カメラマンとしての活動や，関係の深かったディレクターや記者との交流について詳細に書き記されている。例えば，湯浅氏がNHKに入局して最初の海外取材となった『アジア文明の源流』（1963年）でトルコ，シリアを始めとする12か国を訪れた際の，初めての砂漠での撮影の苦労や，当時，関東大震災以来の大地震と言われた新潟地震（1964年）の災害報道に関する取材記録である。

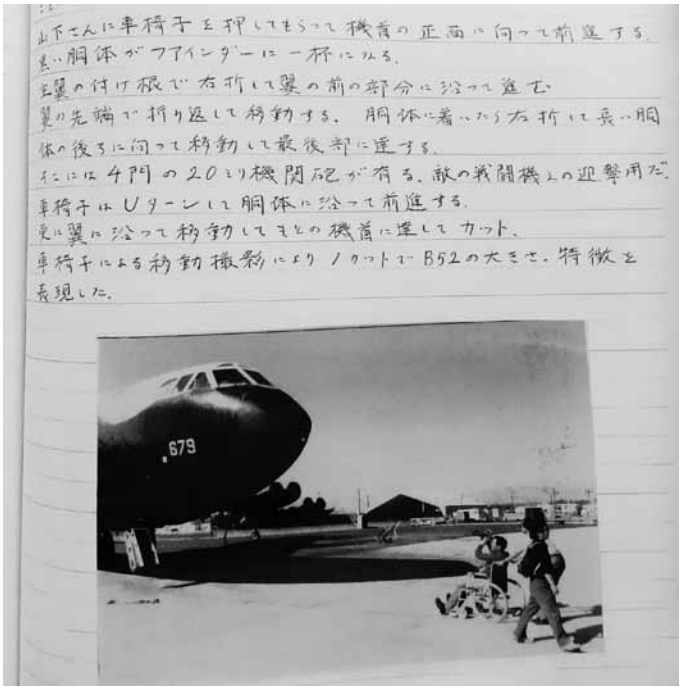
この記録には，どのような思いで撮影に臨んでいたかが，当時の時代背景とともに綴られており，映像取材の現場をうかがい知ることができる資料となっている。

さらに，当時，使用していたカメラを写真付きで紹介していたり，カメラ機材の変遷について記述していたりする部分もある。

1974年のアメリカのフォード大統領来日の際，同行取材を行なったアメリカの取材班はフィルムカメラを使用せず，VTRで撮影したものをすぐにアメリカに送った。このENG[3]の速報性は，日本の取材班に大きな衝撃を与えたという。これを機に年々，速報優先のENG路線に拍車がかかり，1975年になると，ニュース，ついでドキュメンタリー番組が16ミリフィルムから一体型のビデオカメラに移行していくことになった経緯が記されている。

こうした番組制作手法の変容について，湯浅氏は「撮影記録」の中で，「現場における臨場感が豊かで，…現場の状況を鮮明に伝える手段としてリポーターの登場となり，…フィルムのドキュメンタリー番組がナレーションで構成しているのとは対照的である」と書き記している。

さらに，「撮影記録」には，『NHK特集―いまアメリカ戦略空軍は―』（1976年）の取材の様子も描かれている。この中では，アメリカ・



B52の機体撮影の様子

ネブラスカ州の基地で，爆撃機B52の巨大さを表現するため，振動が少なく，小回りが利く車椅子を使った移動撮影によって，1カットでその特徴を捉えるといった方法で撮影を行なったことなどが書き記されている。

おわりに

今回取り上げた資料は，放送史研究のために，湯浅氏本人へのインタビューがきっかけとなって収集されたものである。当初から，文書の収集を目的として集めた資料ではないが，このような研究がきっかけとなって寄贈を受ける資料は少なくない。

番組そのものに加え，こうした資料を見ていくことで，ドキュメンタリー番組についてより深く，重層的に知識を得ることができる。そして，番組制作過程に関する資料は，放送史に関する研究の進展に寄与するだけではなく，番組制作に関する教育などの場でも活用できると考えられる。

ただ，過去に番組制作に携わった関係者が所有していると思われる資料が体系的に収集されているわけではなく，そうした資料が，どこに，どのような状態であるのか，その実態を十分に把握しきれている状況ではない。そうした中で，現在，残されている貴重な記録は，刻々と散逸の危機が迫っていると言える。今後も，関係する研究者などと協力しながら，資料の所蔵状況の調査を進めるとともに，受け入れた資料を活用につなげるために，適切に整理を行ない，保存作業を進め，公開を行なっていくことが重要だと考えている。

（しまだ しょうこ）

注：

1）インタビューの成果は，廣谷鏡子「〈放送史への証言〉カメラマンは被写体と対話する：テレビドキュメンタリーの青春期（前編）」『放送研究と調査』（2011年2月号），「〈放送史への証言〉知識より感性― 直感を信じて，撮る：テレビドキュメンタリーの青春期（後編）」としてまとめられた。

2）日本放送協会編『NHKは何を伝えてきたか 新日本紀行―放送番組全記録一覧 + 番組公開ライブラリーリスト』（2007年）5頁

3）Electronic News Gatheringの略。「電子的ニュース取材」の意味で，フィルムを用いないVTR，あるいはVTR一体型のビデオカメラなどにより，番組素材となる映像，音声を収集（取材）するシステム。